

《論文》

「棄老研究」の系譜（Ⅱ）

— 文学的アプローチ —

佐々木 陽子

# 「棄老研究」の系譜（Ⅱ）

## — 文学的アプローチ —

佐々木 陽子

和文抄録：「棄老研究」の4種のアプローチ（民俗学・法理学・文学・映像作品）のうち、本稿は文学的アプローチに光をあてる。民俗学は棄老習俗が実在しなかったとしているが、文学的想像力は「老いと死」の深淵を問いかけるテーマとして、棄老を繰り返し登場させている。本稿では戦後の棄老文学の代表作ともいえる、深沢七郎の『楢山節考』、村田喜代子の『蕨野行』、佐藤友哉の『デンデラ』の3作品を扱う。労働力として役立つ老人を棄てることで、赤貧の村は生き延びる。この棄老の掟は主人公の老婆たちに受容され、棄老地での死は宿命として甘受される。3作品が描き出す絵柄は異なるが、主人公の老婆たちの棄てられることに対するものわりの良さ、浄土への憧憬と共振することで死を厭わない心性が生み出されることなどが共有されている。本稿では、舞台の空間構成、主人公の死生観、「棄老」のしくみなどを変数に、3作品を比較考察する。

キーワード：棄老 文学的想像力 老いと死 死生観

### 1 問題意識

表1 「棄老研究」の系譜

1 民俗学的アプローチ	① 葬制研究—両墓制・風葬など ② 昔話や伝承 ③ 仏教説話 ④ 柳田「遠野物語」
2 法理学的アプローチ	隠居起源説
3 文学的アプローチ	① 古典文学研究 ② 現代文学研究
4 映像作品アプローチ	映画などの映像表現

本稿は、棄老研究の4種の系譜のうち文学的アプローチを扱う。文学作品の力を借りる以上、社会学と文学の関わり、すなわち社会的想像力が文学的想像力により触発され、文学がどのように社会学を豊かにするのかなど難解な問いに答えを出さねばならない。この考察の詳細は別稿で扱う予定である。したがって、本稿では、旧約聖書の『ヨブ記』とM. Weberの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1920=1989）に依拠して、通常「文学」に括られないものの「文学性」を通して、文学と社会学の越境について簡単に触れるに

とどめる。社会学の境界の線引きの困難について、見田宗介は、社会学が「越境する知」であり「領域横断的」であるため、「問題意識を禁欲しないこと」（傍点は著者）の結果として、学際性が避けられないことを指摘する（見田2006：7-9）。以下、2つの具体例を通じて、「領域横断性」とは何かを考えたい。

1つは、旧約聖書の『ヨブ記』である。訳者の関根正雄は、『ヨブ記』について「文学作品としても世界文学の最高峰のうちに数えられていることは当然である」と明言している（関根訳1971：219）。この言明によれば、宗教と文学の境界も揺らぐ。いま1つは、物語で登場する「どんでん返し」を各所でみせてくれるWeberの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。厚東洋輔は、次のように言う。「『思わざる帰結』とは物語論で言う『どんでん返し』に相当しよう。（略）プロテスタンティズムから資本主義の精神への変形は、比喩的な意味で一つの物語として理解される」（厚東1991：302）。

死の問題は哲学・宗教学・倫理学・医学・社会学・法学・歴史学・文学・民俗学などの節結点到位置づけられ、一つの学問知が死の理解を占有する事は不可能であり、多様な知の動員が必要であろう。学問知は精密さを追及してきたが、こうした精緻な学問知が1人称・2人称の死<sup>1)</sup>の理解に、必ずしも役立つとはいえない。1人称の死についての経験知は存在せず、死には知りつくせない過剰や余剰がついてまわる。本稿が扱う老いた者を老いたという理由で棄てる「棄老物語」では、棄てられることで彼岸に行くことができると期待を膨らませるとのアイロニーが看取される。この意味で、「老いと死」について、「棄老物語」は深遠な問いを投げかける。

## 2 古典文学の「棄老物語」

民俗学者大島建彦は「姥捨ての伝承」を論じる論考の「姥捨ての研究の経過」の最初に、姥捨て山という信濃の更級を想起すること、この地名と結びつけられ『大和物語（第156段）』や『今昔物語』（巻3第9）などのほかにも多くの書物で取り上げられていることに触れ（大島2001：2）、本題の「姥捨ての伝承」や「姥捨てと葬送の関聯」に入っている。

本章では、「姥捨山」や「棄老」に関する記述がみられる古典を、原由来恵、工藤茂、野中和孝などに依拠して概観する。例えば、『古今和歌集』（第17雑歌上878番歌）にのっているよみ人知らずの歌「わが心なぐさめかねつ更級やをばすて山にてる月をみて」の歌やこれに関連した説話（姥捨伝説）を度々俎上に載せている。さらに、『大和物語』（156段）『新撰和歌集』（恋歌）『古今和歌六帖』『今昔物語』（巻第30「本朝付雑事」「信濃国夷奔山第9）『俊頼髓脳』『更級日記』『日本霊異記』（上巻第24）<sup>2)</sup>などがあげられている（原1997；工藤1999a；野中1994）。「姥捨」の伝承や民話を扱った作品は多いが、場所は信濃国更級の姥捨山一帯に限定される。

原は、最も早い時期とされる平安時代初期の10世紀につくられた『古今和歌集』のほか「姥捨」が登場する作品を一覧として提示し、姥捨山を舞台とした『大和物語』の登場以前から存在したとされる上記の和歌の解釈を展開している。この和歌は、更級に住んでいた男が、自分にとっては母親のごとく親しんでいた姨を自分の妻が憎むために、「寺に見せたいものがある」と姨をだまして背負い棄てて逃げた時の歌とされているが、結局、男は姨を迎えに行く。この地に「なぜ棄老伝説が生じたのか」については、信州姥捨山周辺には「墓所」「姥捨」の2つのイメージがあり、その共通点として「死」と「別れ」があげられている。さらに「月」が「姥捨て」の装置とされ、『枕草子』（277段）で「姥捨山の月」を名月としたことから、名月が照らす「墓所」「棄老」に連結する「死」「別れ」のイメージ漂うこの山のもつ「神秘的な美しさ」と「もの哀しさ」のコントラストを指摘し、人々に様々な思いを抱かせ伝説を語らせたとしている（原1997：24-5）。

『大和物語』『今昔物語』では、姨を棄てるのは妻に説得された男であるが、謡曲の『姥捨』では姪の女が姨を捨てるといったように、工藤は「伝承の揺れ」を指摘する（工藤1999a）。また、工藤は、『今昔物語』（巻第20「本朝付け仏法」の「大和国人、為母依不孝得現報語」第31に書承）や『雑宝蔵経』巻第9（112）「不孝婦欲害其姑反殺其夫縁」などいわゆる仏教説話もとりあげている（工藤1999a：7）。

野中は、『日本霊異記』の「実の母親に飯を与えなかった女が、道で拾った飯を食して死んでしまう話」や

『風土記』にある天女を養女にしながら、「早く出て行け」と棄放する話に触れた後（野中1994:2-3）、上記のよみ人知らずの歌の解釈について『大和物語』と『俊頼髓脳』を対比させ、前者は男が男の妻にそそのかされて姨を棄てる話で、棄てた男が歌を詠んだとされるが、後者は姨とその幼女（姪）のみで男は登場せず、捨てられた姨が歌を詠んだとされている。後者では、棄てられた者が嘆き月を眺めるという時代状況を映し出しているとしている（野中1994:4-5）。

### 3 深沢七郎『楢山節考』

以下では、本稿で扱う棄老物語の3作品のあらすじを紹介する。次稿の映像作品アプローチでも取り上げているため、本稿では簡単に触れるにとどめる。その後、舞台の空間構成をおさえた上で、登場人物や棄老のしくみなどの構造を捉え、3作品の比較考察を試み、物語の特色をつかむことをねらいとする。作品批評がある場合はその紹介も取り入れる。

#### 3.1 あらすじ —— 立派な老婆おりんとダメ老爺又やん

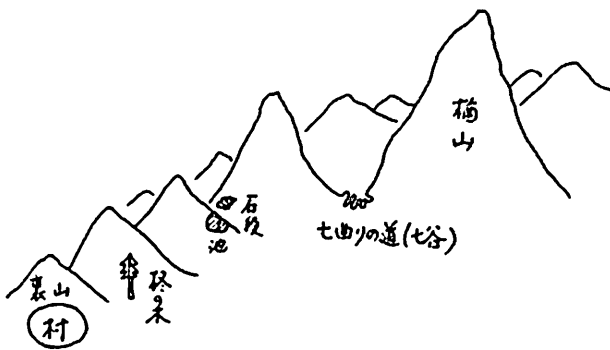


図1 『楢山節考』の空間構成（図1～3筆者画）

『楢山節考』では、老婆おりんの死出の旅である「楢山まいり」に至るストーリーが展開される。一方には、棄老の掟を内面化し息子に背負われ七つの谷と3度池を廻って楢山へと自発的に向かうおりんが、他方には「死ぬのは嫌だ」と暴れ生への未練を断ち切れないダメ老爺の隣家の又やんが登場する。前者は雪の降りしきる中で手を合わせ浄土へ旅立つ覚悟だが、後者は息子に楢山に至る前の七谷の谷底に落とされて絶命する。この老婆と老爺の対比を考えることは、村落共同体において2級村民にすぎないはずの女のおりに「立派さ」「尊厳」を、支配の性という意味で1級村民のはずの男の又やん

に「不出来さ」「未練がましさ」を割り振ることの意味を考えることになろう。雪の中にたたずみ無言で手を合わせるおりんの水墨画のような姿は、死を受容し「みごとに死ぬこと」に使命感すら漂わせる。

#### 3.2 『楢山節考』の特色 —— 3者関係から考える

1つは、主人公おりんと息子辰平と孫けさ吉との3者関係である。主人公おりんに対する情愛を変数にした関係が看取される。一方には、情愛の深い息子の辰平、他方には情愛の薄い孫のけさ吉がいて、前者はおりの「楢山まいり」を遅らせようとし、後者は「楢山まいり」を早めようとする。おりんの「楢山まいり」すなわち死は、前者の息子の辰平にとっては悲しみであるが、後者の孫のけさ吉にとっては無感覚というより祖母の着ているものをもらえて喜ぶほどのものである。主体としてのおりん、客体としての辰平、そしてそこに割り込んでくる媒介項としてのけさ吉の存在がある。媒介項のけさ吉の存在は、あまりにも薄情に思われるが、村落共同体の生存にとって必要な人間類型であることに気づかざるをえない。というのは祖母おりんをドライに送り出す心性を通じて、「楢山まいり」を成立させる存在だからである。この家族間の3者関係は、次に示す村落共同体における3者関係に連結する。

いま1つは、主人公おりんと隣家の又やんと両者を仕切る村落共同体との3者関係である。一方には「楢山まいり」を厭わないおりんが、他方には「楢山まいり」を嫌い生への執着をみせる隣家の又やんが存在する。おりんは「楢山まいり」のために滞りなく準備をし、楢山では手をあわせ念仏を唱えて死ぬ覚悟でいる。ところが、又やんはすでに棄老年齢の70歳を過ぎているのに「楢山まいり」の準備もせず、「楢山まいり」を嫌がり

榎山へ入る前の七谷という険しい谷底に息子の背から無理やり落とされ絶命する。「榎山まいり」の掟により村落共同体は存続してきたが、この掟への忠誠度を変数にして、自発的に忠誠を誓い行動するおりんと、生への執着ゆえに掟から逸脱する又やんの対立構図が描き出されている。媒介項の村落共同体にとって、おりんは理想的モデルである。ところが村落共同体にとってやっかいに思われる又やんの存在が、実はアンチモデルとしての存在意義を担っている。掟に背き七谷から落とされ哀れな死に様をみせるこの又やんは、掟につきものの制裁のありかを可視化させているからである。

ほんの一言、おりんが念仏を唱えていたと書かれているだけのため、浄土信仰におりんがどれほど熱心であったかは定かではないが、浄土に向かう自己像を描き出せるとしたら、死の受容を楽にさせたであろう。村に生まれ村に育ち死んでいくしかないおりんの人生にとって、村の掟どおりにせざるを得ないのであれば、その要請される死を受容し、その死を自分の生きる目的に昇華させる生き方におりんの死生観が透けて見えてくる。

### 3. 3 作品の評価をめぐって

深沢七郎の『榎山節考』の衝撃性は多様に論じられている。饗庭孝男によると、当時の文壇にとって『榎山節考』は、「〈知的〉な近代性の美意識や意識のたわむれからもっとも遠かった。それだけに衝撃的だった」とされ、戦後の近代文学が「近代的自我」の確立を目指したのと無縁な「土俗的基層の白昼における突如とした出現」とされた。一方では「近代的自我」の確立が夢想され、他方では「土俗的心性が可能態としてその基層に連続しながら息づいていることを念頭におくという複眼的なものの上にはか成り立たない」と捉えられた（饗庭1994：235）。柳田國男の『遠野物語』の伝承では、村落の見える所に棄てられた老人が野作業の手伝いをして命をつなぐため、『榎山節考』のように棄老が老人の死に直結しない。饗庭は水平軸と垂直軸を使って『榎山節考』の空間構成を次のように解説する。水平軸で村落共同体の生活を見ると、集落のムラと耕地のノラと採取地の林野やヤマの区分に対し、垂直軸でみると、「基底にムラをおき、死者（祖霊）の住うところ、神の宇宙（例えば山）を考えることができよう」と捉え、「垂直軸の極点は山である」とし、『榎山節考』は、この垂直軸の山岳信仰の聖化に収斂している」とし、「山中他界」に位置づけている（饗庭1994：240-1）。

工藤茂は、姥捨・姨捨・棄老といったモチーフで書かれた作品として、数多くの文学作品を列挙し、さらにエッセイとして、水上勉の『じじばばの記』などをあげている。工藤は、福井県若狭湾にそびえる山の谷底の集落で育った水上のこの作品に光を当てる。水上は、「入ってはいけない」ところに入った幼いころの記憶にある「白いもの」が人骨であったことを想起する。と同時に貧困な地域において「じじ取り、ばば取り」という言葉を思い出し、老いた爺や婆が長生きするのを迷惑とみる風潮があった記憶がよみがえる。老人の寝床は納戸で北側の寒い場所で貧しい家では畳もなくいわば「姥捨の場」とある。最も貧しい家庭に与えられた職業である区長の小遣い役の「村あるき」を89歳までして生活した母方の祖母、そして目が見えなかったが同じく「村あるき」をした父方の祖母について記している。目の不自由なこの老婆は、まだ幼かった水上を連れて歩いたが、子どもたちにいたずらされ溺れ寝込んだあげく死んだ祖母が、水上の記憶に沈んでいる。この作品には水上の老人への鎮魂が込められ、「現代の姥捨」との思いがあらうと工藤は記している（工藤1999b）。

『榎山節考』は1956（昭和31）年、第1回の中央公論新人賞の受賞作であり、この作品については、文壇で多くの人々から高い評価を得ており、文学史においても特異な存在感を示したといわれている。だが、民俗学者の関敬吾は「姥棄山考」という短文のなかで、一読したのちの読後感を、次のように吐露している。「『いったいこの小説のどこがいいのですか』とたずねたほど、なんの感興もわかかなかった」と。編集部の人々は異常な題材を扱い、山に棄てられる老婆のストイシズムがよく表現されていると応える。それに対し、関は、「生活の苦しさ<sup>ツ</sup>と老人遺棄とどんな内面的な関係があるのか、生活の苦しさ<sup>ツ</sup>がはたして老人の慣習となり、この種の伝説を創り出したか、また伝説がどれだけ現実生活を反映するかということなどが、筆者の思考にうかんでくる」とあり、この作品が老人遺棄の慣習であることについて証拠なしとしている（関1966：114）。他方、作り話にすぎない棄老伝説がなぜこうもまことしやかに語られ、それにリアリティを感じて感動さえするのかについて、映画評論家佐藤忠男は「人は老いて死ぬということが絶対確実なことであり、それに対して人それぞれに覚悟

を決める必要があるから」と答えている（佐藤忠2009:57）。赤坂憲雄は柳田の『遠野物語』を出して「死と共同体」抜きに伝承を語ることはできず、「死と共同体」こそが『楢山節考』を貫く主題であると記す。赤坂は、深沢が反近代・反ヒューマンイズムの作家と言われることを認めながらも、「深沢の文学世界を、前近代の習俗や伝承の世界に単純に還元」する解釈の限界を指摘する（赤坂1988:132-3）。さらに、楢山という他界に至る道筋（村から三つ目の山を登って行けば池があり、池を3度回り4つ目の山へ登り七谷を越せば楢山に通じる）の図を描き物語の空間構成を提示することで、深沢の作品の死生観を説明する（赤坂1988:134）。つまり、「楢山は山中他界」に設定されており、楢山は白骨が散乱する「荒涼とした葬地」でありながら、他方では神の住む山とされる信仰対象でもあり、矛盾をはらんでいる。柳田國男の『遠野物語』111段に登場する話<sup>3)</sup>では、棄てられた老人たちがデンデラと呼ばれる地に追いやられ、日中は里の農作業を手伝い食糧を得て、夕方になるとデンデラへ帰っていく。村を挟んで左にデンデラ、右にダンノハナと呼ばれる共同墓地が描かれている（赤坂1988:136）。この空間構図は、『楢山節考』とは大きく異なる。赤坂は『遠野物語』の老人の時間が、デンデラを経てダンノハナの墓場に至る習俗の時間の長さ（生→老→死）に対し、『楢山節考』では「楢山まいり」という死に一気に昇りつめる時間の圧縮を指摘する（赤坂1988）。

キリスト教徒の視点から解説を試みている田北耕也は、『楢山節考』が宗教的ながら宗教臭くなく、「棄老の陰惨性」が「宗教的な希望に転換した」とし、この作品では楢山に住むとされる神に通ずる楢山へは「道があっても道がなく」とあるように不透明で、神が人格的かつ神秘的な存在として漠然と描き出されていることを指摘する。楢山まいりの事ばかり考えているおりんは、「山へ行って、新しいむしろの上に、きれいな根性で座っている」ことを目標に据える。この通俗語である「根性」に、田北はキリスト教的「神人合一」を読み込み、最後に登場する雪を「奇跡」の意味合いでの解説を試みる。『楢山節考』の不鮮明で曖昧模糊とした描写に、むしろ深い宗教性を指摘する（田北1957）。

若林美どりは、近代的自我を前提とする近代ヒューマンイズムやリアリズムへの「アンチテーゼ」として当作品を位置づける（若林1972:134-5）。『楢山節考』を過酷さに収斂させず、冷酷ななかに美しさを見出し、「楢山まいりを悲惨としてではなく、希望としている所に意味があるのである」。若林は雪の中、一心に念仏を唱え座すおりんに、「ラディカリズムと同時に余裕」を見出す（若林1972:140-1）。

平田利晴は『楢山節考』の新人賞受賞後評で、「僕は当選に全然異論はないけれども、いやな小説だね。（笑声）。好感が持てない」との三島由紀夫のコメント<sup>4)</sup>を紹介している（平田1982:43）。「〈七十になれば楢山まいりに行く〉という赤貧ゆえの農村の掟を誰もが信じて疑わない人間集団の物語である。（略）四季のめぐりと同じように受け入れて生きる底辺農民を描く深沢の筆致に、しかし悲愁や憤りはみじんもない」（平田1982:47）と、徹底した受動性の積極性へと転化する逆説を指摘する（平田1982）。

## 4 村田喜代子『蕨野行』—— 死から再び生へ向かうレン

### 4.1 あらすじ —— 老婆と老翁の共同体としてのワラビ野

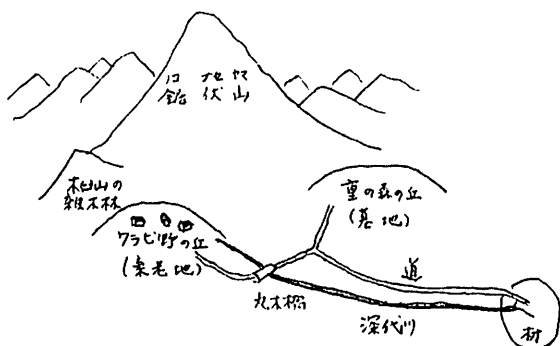


図2 『蕨野行』の空間構成

村ではあいかわらず重労働に追われ人間性を剥奪された生活を強いられ、その結果として首をくくったり余分な子を孕み婚家を出され放浪したりする不幸な女たちの話が『蕨野行』にはあふれている。だが、ワラビ野に捨てられた9名のジジ・ババの関係は男女間の断絶が強調されず、むしろ運命共同体として描き出されている。男女の助け合いの風景は、寡黙な老翁の甚五郎が病んで幼女と化した老婆チヤを献身的に介抱する姿に象徴的に表出している。死が間近に迫っているこの老婆チヤをわが妻にすると宣言し実行する老翁甚

五郎の決断と行為は、宗教的境地さえ感じさせる。主人公のレンについても馬吉から「来世は一緒になろう」と声をかけられ馬吉の胸に抱かれるシーンが登場する。豊作の前触れとされる雪が降り始めると、ワラビ野に生きるジジ・ババは喜び合掌する。棄てられてもなお村の豊作を祈る老人たちの心性は、次に登場するデンデラの老婆たちの村に対する怨念と対照をなす。レンは死して靈魂が肉体から抜け、嫁ヌイの腹の子として再生する。死後レンは身が軽くなる感覚を味わい、嫁の腹をめぎす。

#### 4. 2 「蕨野行」の特殊性 —— 他の2作品との差異

村田喜代子の『蕨野行』の特徴を、他の2作品と比較し以下4点において差異を提示する。ワラビ野に棄てられた9名の老人達の笑い声さえ聞こえてくる描写を含みながら、生きること、すなわち死に至るまでの過酷さがこの作品には横たわっている。

第1に、老人の棄てられる場所が険しい山奥ではなく村から半里ほどしか離れていない野（地形はなだらかな丘）であるという点が、他の2作品と異なる。村と棄て場が地理的に接近しているということは、村里離れた山奥に棄てられるより恵まれているように思われなくもない。だが、村が見えるということは貧しく苦しい生活の中にあってもありえたであろう楽しい一時を、ノスタルジックに思い起こす可能性にも連結しかねまい。ノスタルジーとは過ぎ去った過去のある止められた時間への哀愁であり、それは現実逃避になると同時に、動かしえない現実を現実として直視させる潜在的機能をも発揮しよう。つまり、山奥に棄てられていれば、村里と棄て場の「乖離」の意識、越えることのできない「境界」の意識が死の覚悟を引き出すであろう。ところがワラビ野のように村を見渡せる場所が棄老地の場合、寒さがやってきて雪が降り餓えて死ぬことはわかっているながら、「乖離」のなさ「境界」のなさが、死に逝く老人達の担う過酷さを増殖させよう。

第2に、「物語」というジャンルは共通でありながら、3人称の語りで他の2作品が語られているのに対し、『蕨野行』は棄てられた姑レンと残された嫁ヌイとの呼びかけ合いの相聞歌形式で展開されている点が他の2作品と異なる。姑のレンによりワラビ野で起きていることを、嫁のヌイにより村で起きていることを、同時進行的に読者は知ることになる。それゆえに、メタレベルでワラビ野と村を読者が鳥瞰する構図となっている。レンとヌイは姑嫁関係で血縁関係にないものの、両者間に流れる情愛の深さが随所に感じられ、描き出される悲惨な現実を両者の情愛が包み込む構成になっている。

第3に、他の2作品では「棄老」が死に直結し、老人が棄てられるということは、老人を生産活動から切り離すことを意味する<sup>9)</sup>。だが、『蕨野行』では棄てられた後も棄老地のワラビ野から村に通い生産労働に老人が携わる仕組みになっている。すなわち、村から半里ほどしか離れていないワラビ野は村と丸木橋でつながっており、棄てられた老人たちは連日この橋を渡って村での農作業の手助けをする限り、その日の食糧を得ることができる。だが、足が萎え体力が落ちてこの橋を越えられなくなった時、死が接近する。身体を病んで里まで働きに出られなければ、食糧をえられず餓死が待っているからである。その日が訪れるまで真綿で首を絞められているような時間感覚が存在する。『檜山節考』ではおりんが雪の降りしきる中で念仏をあげながら凍死していく姿が浮かび、死に至るまでの短い時間が想定される。だが、『蕨野行』では、仲間がそして自分の身体が萎えていくのを眺めつつ死んでいくことになる。

第4に、『蕨野行』は主人公の死によって物語が閉じず、主人公の「転生」につながっていく。この点が他の2作品と異なる。「転生」により、生から死へそしてもう一度生へと流転する死生観が展開されている。宿命的にもレンは、子を宿している嫁のヌイの腹の子に転生する。本作品が「棄老」という重いテーマを扱いながら情景がなぜか明色なのは、こうした終わり方も関係しているかもしれない。主人公のレンは、自らの死の場面で着物を脱ぐように皮膚を脱ぎ棄て体が軽く浮き上がる感覚を味わう。「魂」「靈魂」といった言葉は使用されていないが、抜け殻のように身体を脱ぎ棄てることで身が軽くなるシーンが「死」の描写であろう。

#### 4. 3 「蕨野行」の特色 —— 3者関係で考える

第1は、「村」と「ワラビ野」とそしてこの両者をつないでいる「橋」との3者関係である。この丸木橋は

「生と死」「村とワラビ野」「此岸と彼岸」「故郷と異郷」といった対立項をつなげる負荷の重いメタファを背負っている。そして、2つの異なる世界の媒介項ともいえるこの橋は、労働のメタファでもある。この橋を渡る限りその先に担うべき労働があり糧が存在する。村とワラビ野が繋がっていることの意味は、死に近づく者が生を象徴する村を目の当たりにして死んでいくことをも意味する。橋は異なる世界をつなぎながら、同時に「境界」をも可視化させる機能をもち合わせる。老人たちは橋に助けられ村里に糧を求めて通うことができるが、また必ずこの橋を渡って村里から帰途につかねばならず、こうした意味で橋は村との隔離をも意識させるアンビヴァレントな存在物である。橋が雪で閉ざされ、あるいは村に農作業がなくなれば橋は機能しなくなる。そうなると、棄てられた老人達にとって、死の到来を意味する。足の萎えたある老婆が、この橋を渡らねばならず、杖を背にはさみ胸元を泥だらけにして渡るシーンでは、「芋虫」の比喩でこの老婆の橋を渡る姿が形容されている。

第2は、主人公レンと嫁ヌイと息子団右衛門をめぐる3者関係である。レンの息子団右衛門は庄屋の長男として「理」を代表し決断せねばならない立場にある。この団右衛門の後添いに入ったばかりで年も若いヌイは「情」を代表している。お婆レンは「理」と「情」をあわせもつ人物として描き出されているように思われる。ワラビ野に棄てられた老人たちは農作業や狩猟が禁じられているが、掟を破り獣や川魚をとり乏しい食糧を分けあい暮らす。レンは「生きられるだけ生きよう」と決意するが、9名いた仲間が1人、2人と欠けていく。嫁の「ヌイ」は実母のごとくレンを慕うがため、レンは「情」に流されてはならないとの自己規制をかき、一度ワラビ野に入れば里に戻るなどありえないにもかかわらず、あまりに悲しむヌイに同情し、レンは団右衛門たちに秋には戻るとヌイに嘘をつくようにと言って「野入り」する。レンとヌイの深い情愛の有り様とレンへの「情」を禁欲し「理」に生きようとする団右衛門とが、コントラストをなして描き出されている。村落共同体の存続と家族の情愛の背反が団右衛門とヌイに割り振られているようである。レンは『檀山節考』のおりんのように死ぬことを目的とせず、棄てられた後も「生きられるだけ生きよう」との内なる声に従う。死を甘受しつつ、残された生を生きつくすというのがレンの死生観の根幹をなしているようである。

## 5 佐藤友哉『デンデラ』——「支配の性＝男」を憎む老婆たち

### 5.1 あらすじ——ジェンダーの亀裂



図3 『デンデラ』の空間構成

『デンデラ』では、死んだはずの老婆たちが、棄て場の「お山」の背後にデンデラという共同体を作って生き延びている。「棄老」を実施する村そのものを男性性に重ね、村＝男を徹底的に憎しみの対象に据える一群の老婆たちが登場する。「男ならくそくらえ」と罵り叫ぶ老婆の心情には、村を仕切る支配的存在、この「棄老」習俗を支える性としての男が位置づけられている。現実には、男も女同様に棄てられるのではあるが、こうした意識を反映して、『デンデラ』では女たる老婆のみが救済対象となる。ここでは、老齢という世代を変数

にしては解消しえない男女間の亀裂が濃厚に描き出されている。主人公カユは浄土行きを心待ちにしていたが、デンデラの老婆らに助けられたことで、身が穢され浄土行きを邪魔されたと怒り狂う。50名（カユを含め）から成るデンデラの老婆たちは、貧しいながらも共同体として助け合い生きている。デンデラの老婆たちのなかには、村を憎み復讐を夢見る者たちのほかに、村人に隠れてつくり上げた共同体デンデラを理想郷にしようと考える者もいる。だが、熊の襲撃や疫病（実は食傷）などの被害により老婆が次々と死亡し、50名いたのが6名にまで落ち込む。カユは、多くの仲間の命を奪った熊にとどめを刺すべく、熊を村へおびき寄せ武器を所持



する村人に熊を殺させるために、自ら犠牲となる覚悟で村を目指す。物語の終末の主人公の描写は、他の2作品においては静謐のうちに終わるが、デンデラではカユが力走するシーンで幕を閉じる。

## 5. 2 「デンデラ」の特色 —— 3者関係で考える

第1に、「デンデラ」と「お山」と「村」の3者関係を取りあげる。襲撃派に代表されるように、自分たちを棄てた村は破壊したい憎悪の対象であり、デンデラと村は対峙する。両者にとっての媒介項とされるお山は、村にとっては棄老地であると同時に棄てられた老人にとっては浄土に連なる地という二重性をもっている。さらに、棄てられた老婆たちが築き上げたデンデラにとって、お山は自分たちの共同体の一員を補充する地であり、棄てられた老婆を死から生へと呼びもどす神託の地でもある。媒介項としてのお山は、村との連続性とデンデラとの連続性をもつ。デンデラの存在は村には知られておらず、結局、デンデラの住人のみが村とお山の両方を知り尽くしており、この点では老婆たちは優位に立っている。3つの空間は、その住人により差異化される。デンデラは棄てられた老婆のみが居住する共同体である。お山には70歳以上の男女が棄てられ、そして、村には70歳未満の村人が居住する。デンデラと村の対峙は、別の視点からも捉えうる。すなわち、村よりさらに食糧事情の厳しいデンデラであるにもかかわらず、身体が動かなくなった病人もデンデラでは介抱し合い生活し、決して労働力になりえないという功利主義の視点から排除しない。「口減らし」として老人を棄てる「お山まいり」を行う村より、はるかに弱者にとって「デンデラ」は住みよい地という逆説が存在する。

第2に、「デンデラ」の住人の老婆たちの3つのグループの対立構図を考えたい。1つは村への憎悪を膨らませ村を破壊し尽くしたいと願う訓練まがいなことまでする襲撃派、2つ目にはデンデラを理想郷にするために守りぬきたいと食糧備蓄に勤しむ穏健派、そして第3の媒介項としてどちらにもつかないあるいはつけない老婆達が存在する。第1と第2のグループは目標は異なるが、目標を持って生きている点では共通している。主人公カユは第3のグループに位置づけられようが、次第に生きるための大目標を求める心性へと変化していく。最初、「デンデラ」に救い出されたことで浄土に行けなくなったと恨みを膨らませた「死にたがり屋」のカユは、浄土に対する疑問を持ち始め、「死にたいけど死にたくない」というアンビバレントな心情を持つに至る。「人間たちは多様な怨念をもち浄土へ向かうのだから浄土はきれいなところでなんかではあり得ない」といわれ、「死を浄化する」「死を受容」するものとして浄土を利用していた自分に思いが至る。やがて浄土の存在そのものに疑問をもち始めることをみても、カユの死生観は変容する。

## 6 3作品の比較検討

主人公の老婆たちは、いずれも自分が死すべき運命であることを受容し、村落共同体の掟に反発せず、生への執拗な執着を見せない点を共有しており、いわば村落共同体にとって模範生といえよう。ここでは3作品の関係をいくつかの変数を用いて図式化し比較検討する。

図4は、3作品を時間軸と空間軸を使って位置づけることで、3つの作品の特色を図式化したものである。「デンデラ」のカユのみが、第4象限で終わるはずが、デンデラの老婆たちに助けられることにより第1象限に移行する。

図5～図7は3作品を3つの変数を用いて図式化し、その差異を明示している。

図5は、棄老地に関するものであり、村からの距離、棄老地の地形、棄老の際同行者が目的地まで同行するか否かの変数で比較している。三角形の面積が大きいほど、村からの乖離の度が大きく棄老に物理的困難が伴うことを示している。ワラビ野のように村から半里の丘が棄老地であれば、付添いの者が老人を背負っていく必要はなく、老人も歩いて家族が途中まで見送る形態となる。しかし険しい山道を登り続ける奥深い棄老地の場合は、『檜山節考』『デンデラ』にみられるように、棄老地まで息子が背負っていく形態となる。

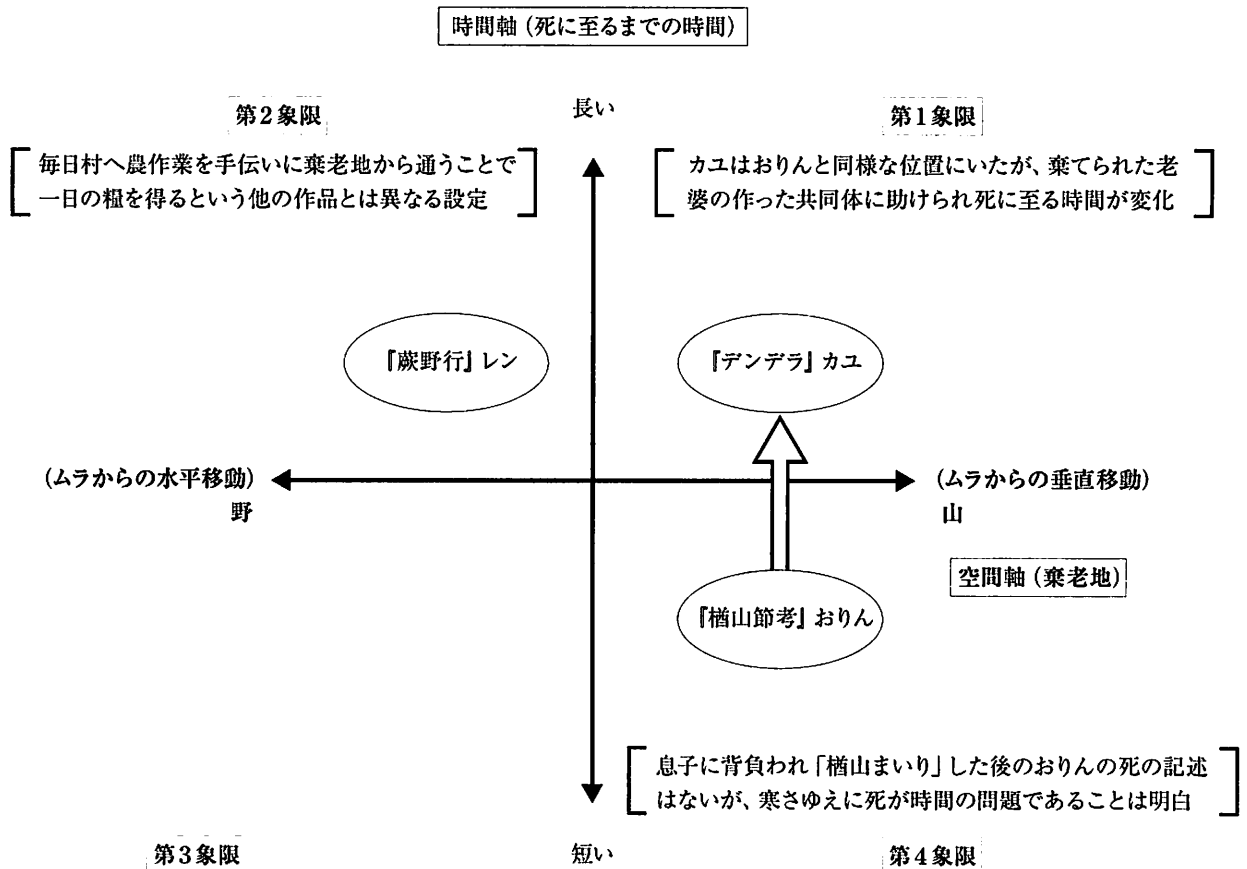


図4 時間軸と空間軸でみる主人公の位置づけ

図5においては、『蕨野行』が特異である。

図6は、棄てられた後の生活に関わる。棄老地での生産活動の有無、生活が集団か個人か、棄老後の村との接触の有無の3つの変数で比較している。三角形の面積が大きいほど生産活動に携わり村と接触しながら、「棄老即死」を意味せず集団で生き続けることを意味する。したがって、面積が大きいほど、逆に死に至るまでの困難や時間を背負い込むことになる。榎山に棄てられたおりんの場合は、死を待つのみで死に最も近い位置にいると想定されよう。浄土願望の強かったカユもおりんと同様な死に方が想定されていた。『蕨野行』のレンは凶作ゆえに通常より早く村の仕事がなくなり、ひもじい思いをしながらも、仲間たちと協力して狩りや漁を生命をつなぐ。だが、冬の到来は彼らから食糧をとりあげ死への道を切り開くことになる。

図7は、主人公の死生観の大枠を示すもので、死の受容の有無、死までの時間の長短、死後の世界観を変数にしている。三角形の面積が小さいほど、死への抵抗が弱く、浄土への憧れ、死の受容が内面化されているといえよう。『榎山節考』の主人公おりんが筵の上で一心に念仏を唱えていること、また『デンデラ』の主人公カユは極楽浄土に行くのだと思い込んでいることから、両者では死後の世界観を共有しており、少なくとも浄土信仰をもっていたと捉えられる。村落共同体の貧しさは極楽浄土への夢を倍加させる機能を果たしと考えられよう。この世よりはるかに恵まれたすばらしいあの世が存在しているとの浄土信仰は、死への恐怖や死への忌避感情を慰撫しよう。『榎山節考』の最後におりんが筵の上で念仏している場面が登場する。雪が降り出してきたことから、おりんの凍死は時間の問題と推測されるという意味で、「安楽死」が連想される。おりんの最期は記されず読者に委ねられているが、カラスと雪はおりんの死の近さを表象しているといえよう。「死の美学」の体現者ともいべきおりんの死の覚悟の「見事さ」とは裏腹に、祖母の「榎山行き」を急がせてきた孫のけさ吉とその嫁の松やんが、おりんの帯やはんてんを自分のものにしてすでに着ているシーンで物語の幕を閉じさせている。もはやおりんはこの家族におらず、おりんが欠落しても彼らの生活は昨日と同じように流れていく。

「死に逝く」おりんのいる檜山と、孫のけさ吉に代表される世俗世界の落差こそ、死ぬことと生きることとの実相の乖離を表出しているのかもしれない。

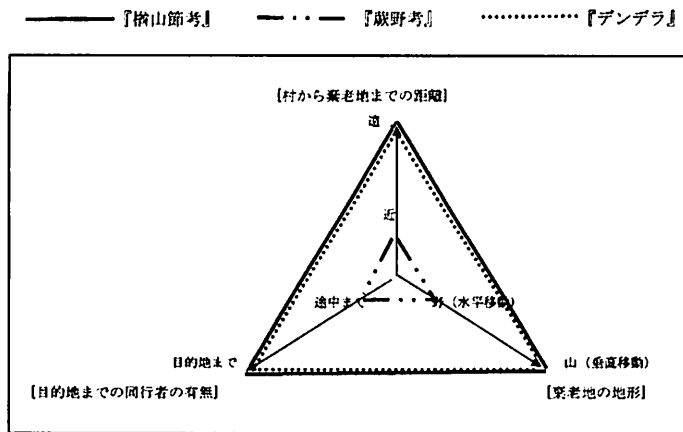


図5 棄老地の特色

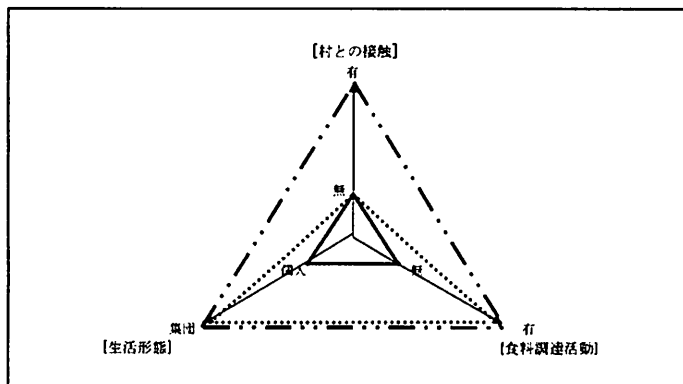


図6 主人公の棄老後

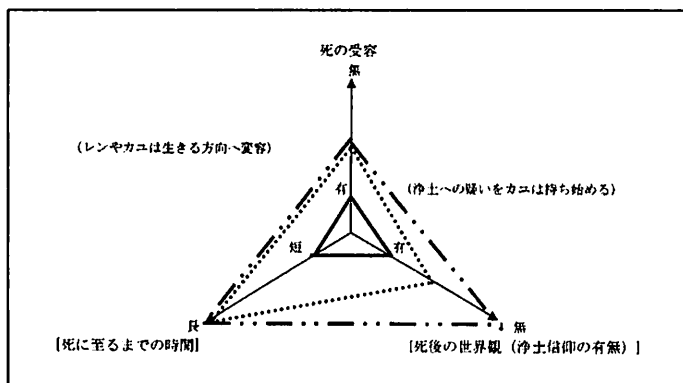


図7 主人公の死生観

## 7 結語

「棄老物語」の主人公が老爺でなく3作品とも老婆であり、「姥捨」の語りに収斂することについては、ジェンダーからの視点が問われねばなるまい。重要なテーマであるが、これは別稿で扱う。

『檜山節考』の主人公おりんはあたかも自ら死を欲望するかのごとく振る舞うが、実は死へと向かわしめる力学を作動させ、死への欲望を創出させているのは村落共同体といえよう。「死の模範生」ともいいうるおりん

は、村落共同体の欲望をわが欲望に置換し、死出の旅へと向かう。自らの死の幕引きを演じてみせるおりんのあり様は、おりんの自己尊厳の感情を満たし、自力本願による死の達成のごとくに映る。だが、実はそれこそが村落共同体にとって最も望ましい死の姿であろう。おりんは自らの死期を早める選択をして檜山に入っており、向こうからやってくる死の到来を待たずに、我が身に死を引き寄せている。物語の展開のなかで、おりんのストイックな描写が際立つものの、それとは逆に辰平の情もまた重要な意味を有すると言えよう<sup>6)</sup>。

他方、『蕨野行』のレンは死の日が到来するまで生き抜こうとの決意の下、仲間を看取りながら生を全うする。労働力としての役割を終え、寒さと飢えで死出の旅へ向かう運命から逃れられないレンは、仲間の死を看取り、そして自分の死の到来まで生き抜く。死を自ら引き寄せずに死の到来に身を委ねるレンのあり様には、人為的にはいかんともしがたいものとしての死が描き出されていると共に、最後まで生きることも表出させている。

『デンデラ』の主人公の「死にたがり屋」だったカユは、楽園のように描いていた浄土の存在に疑問を持ちだし、やがてある目的のためなら死んでもいいとの思いに至る。浄土が思い描いていたほど美しいはずはないとの思いによって、カユの死生観は大きく変容する。考えることもせずひたすら貧しさのなかを生きてきたカユは、死を間近にして初めて自分の頭で考え始め、浄土信仰の欺瞞に気づく。生への絶望を増幅させる浄土信仰が揺らぎ始めた時、死への憧憬も同時に薄れ始める。レンのように死の到来を待つのでなく、カユは自ら村に襲撃をかける形で死を招き入れる。

本稿が扱った作品以外にも、「棄老」に関わる語である「姥捨」（うばすて）、「姨捨」（おばすて）<sup>7)</sup>、そして「死者の霊の行くところ」を意味する「デンデラ」<sup>8)</sup>をタイトルとした作品としては、太宰治の『姥捨』<sup>9)</sup>（[1947] 1964）、堀辰雄の『姨捨』<sup>10)</sup>（[1940] 1992）、井上靖の『姨捨』<sup>11)</sup>（[1955] 1995）、里見弴の『姥捨』<sup>12)</sup>（[1946] 1989）などがあるが、必ずしも「棄老」をストレートに扱っているわけではない。近年の作品でタイトルにこうした語が使用されているものに、例えば山本昌代の『デンデラ野』（1995）がある。長男、次男を亡くし3男家族と同居している83歳になる老婆の寝床には、ダイニングキッチンがあてがわれている。親子水入らずの生活に割り込んできた姑が気に食わない嫁は、被害者意識で固まっている。嫁は明るい声で、「おばあちゃん、デンデラ野って知っているか」と聞いてくる。「昔は60歳になると、みんなそこへ行った」といい、さらに「昔の人は偉いものね。身の引き際というのを、みんなが知っていたのね」と続ける。老婆の心には「デンデラ野」<sup>13)</sup>という言葉が引っ掛かる。この部分で「棄老」がちらつく。

本稿が扱った3作品では、棄てられた老婆の死がストレートに可視化している。だからこそ、生を問いかけるモメントが潜在化しているとも言えよう。本稿は文学作品の力を借りたが、その力の内実を提示するためには、文学的想像力がどのように「老いと死」をテーマとする社会学的想像力と連結するかに答えを出さねばならない。これが、今後の課題である。我々は「いま」「ここ」という限定された時空を超越して生きることはできないが、文学的想像力は、「いま」「ここ」という限定された時空を超越させるモメントを孕む。棄老文学は、アンチヒューマンなテーマを通してヒューマンを問いかけるモメントを孕んでいると共に、「ヒューマン」が有する欺瞞性をも考えさせる深さを文学的想像力は有するといえよう。

## 註

- 1) Vladimir Jankélévitchは、「第三人称が平静の原理なら、第一人称は疑いもなく苦悶の源泉」であり、第二人称の死すなわち「親しい存在の死は、ほとんどわれわれの死のようなもの、われわれの死とほとんど同じだけ胸を引き裂くものだ」（Jankélévitch 1966 = 1978: 25、29 傍点は原著者）と指摘する。このように、死は「人称」を潜伏させているため、通常、自分とは無関係な「三人称の死」には平然としていられるが、「二人称の死」や「一人称の死」に直面すると、衝撃を受け悲嘆のあまり絶望に落ち込むことは想像に難くない。
- 2) 工藤は、『大和物語』や『今昔物語』と異なり、『日本霊異記』では、防人として筑紫に母と子を迎えて赴任している男が家を守っている妻恋しさから、母を殺して喪に服せば、役を逃れ妻と会えると考え、母をだまして山中に連れ込みその首を切ろうとするが、地が裂けて男は陥る。だが、母は天に許しを請い息子である男の髪をつかみ止めたが、ついに落ちてしまうという母の慈悲を褒め、子の不孝の罪を戒める話を紹介している（工藤1999a: 4-5）。
- 3) これは次に取り上げる『蕨野行』の舞台装置であり、作者はここから触発を受けている。
- 4) この三島の発言は、伊藤整ほか（[1956] 2014: 290）の選者3名の座談会でのものである。
- 5) 『デンデラ』も『檜山節考』と同様に山に棄てられる話だが、『デンデラ』のカユは、生き延びた老婆たちが作った共同体に救い出され

- てしまい、その後は生産活動に関わらざるを得ない。だが、「棄老」の原型としては『炭野行』のように最初から生産活動が前提とみなされてはいない。
- 6) 深沢は『思い出多き女おっ母さん』（1993）の肝臓癌の母を背負った場面で、『楢山節考』の一場面と自分自身を重ねて描写している。これについての分析は木村（1974）を参照。
  - 7) 「ウバ」は母に代わって乳を飲ませる女性という狭い意味でなく、本来敬意の対象となりうる年配女性を意味した。「オバ」はかつて家の傍系成員の女性の呼び名とされていた（福田ほか編1999：174, 258）。
  - 8) 野村純一ほか編著にも、老人を棄てた場所と記されている。「蓮台野」となっているが、「デンデラ野」はこの転訛であるともいわれる（野村ほか編著1992：165）。
  - 9) 太宰治の『姥捨』は、妻がある男とあやまちを犯し、夫も荒廃しまった日常生活を送るなか、夫婦一緒に心中しようとする話である。「姥捨」とはあるが「棄老」と直接関わらない。
  - 10) 堀辰雄の『姥捨』は、更級日記が愛読書であった少年の日々への思いが語られたエッセー風の短編で、更級日記に登場する女性への共感がつづられている。
  - 11) 井上靖の『姥捨』は、子ども時代に「棄老」説話を聞いた時の悲しい思い、母の高齢化に伴う思い、信州姥捨山を訪れたことなどを織り交ぜた随筆風の小品で、「棄老」そのものを主題に展開しているわけではない。
  - 12) 里見弴の『姥捨』は、妾室に住む女主人と家事手伝いの二人の「姥」を、戦時中、信州上田の疎開地に悪戦苦闘して届ける話であるが、少しでも生き延びさせるために棄てに行くのだと内心で思う。こうした場面で、「姥」の字が登場する。
  - 13) 稲場紀久雄は、「デンデラ」は、岩手県遠野市の「姥捨て」の場所の呼称として知られているが、「デンデーロ」は多摩川上流の山梨県丹波山村に残る地名、蓮台野は京都市北西郊の宮本武蔵の決闘の場として有名な場所であるとしている（稲場2004：34）。

## 文献

- 饗庭孝男, 1994, 「想像力の民俗学Ⅷ-遊行僧の唱導性- 深沢七郎の『楢山節考』と『笛吹川』」『文学界』48 (7) : 234-51.
- 赤坂憲雄, 1988, 「異相の習俗・異相の物語—『楢山節考』を読む」『ユリイカ』20 (12) : 132-9.
- 太宰治, [1947] 1964, 『姥捨』『太宰治集』河出書房新社, 63-77.
- 深沢七郎, [1956] 2014, 『楢山節考』『楢山節考／東北の神武たち 深沢七郎初期短篇集』中央公論新社, 9-73.
- , 1993, 「思い出多き女おっ母さん」『ちくま日本文学全集深沢七郎』377-87.
- 福田アジオほか編, 1999, 『日本民俗大辞典上』吉川弘文館.
- 原由来恵, 1997, 「平安朝における『姥捨』の伝承と展開」『日本文学風土学記事』22 : 18-28.
- 平田利暗, 1982, 「深沢七郎論序—『楢山節考』の受動的性格の意味」『論究日本文学』45 : 42-52.
- 堀辰雄, [1940] 1992, 『姥捨』『ちくま日本文学全集堀辰雄』筑摩書房, 398-421.
- 稲場紀久雄, 2004, 「日本環境文化史に関する研究（その11）姥捨と山姥の関係性」『大阪経大論集』54 (5) : 33-46.
- 井上靖, [1955] 1995, 『姥捨』『井上靖全集第四巻』新潮社, 497-510.
- 伊藤整ほか, [1956] 2014, 「新人賞選後評—伊藤整×武田泰淳×三島由紀夫」『楢山節考／東北の神武たち 深沢七郎初期短篇集』中央公論新社, 284-300 (1956『中央公論』71 (12) : 201-7).
- Jankélévitch, Vladimir, 1966, *La Mort*, Paris : Flammarion. (= 1978, 仲沢紀雄訳『死』みすず書房.)
- 木村東吾, 1974, 「深沢七郎論：『楢山節考』の夢の崩壊過程について」『近代文学試論』12 : 54-66.
- 工藤茂, 1999a, 「葛藤型の姥捨説話」『別府大学紀要』3 : 1-8.
- , 1999b, 「現代文学における『姥捨て』の系譜—水上勉『じじばばの記』」『別府大学国語国文学』41 : 1-11.
- 厚東洋輔, 1991, 『社会認識と想像力』ハーベスト社.
- 水上勉, 1978, 「じじばばの記」『枯野の人』旺文社, 55-99.
- 見田宗介, 2006, 『社会学入門』岩波書店.
- 村田喜代子, [1994] 1998, 『炭野行』文藝春秋.
- 野村純一ほか編著, 1992, 『遠野物語小辞典』ぎょうせい.
- 野中和孝, 1994, 「姥捨山伝承の成立背景：俊頼の注釈姿勢に触れる」『活水日文』29 : 1-10.
- 大島建彦, 2001, 「姥捨ての伝承」『日本文学文化』1 : 2-18.
- 佐藤忠男, 2009, 「一冊の本（13）棄老伝説 現代社会を衝く」『ひろばユニオン』571 : 54-7.
- 佐藤友哉, [2009] 2011, 『デンデラ』新潮社.
- 里見弴, [1946] 1989, 『姥捨』『昭和の文学全集第3巻』小学館, 587-610.
- 関敬吾, 1966, 『姥捨山考』『昔話と笑話』岩崎美術社 : 1-7.
- 関根正雄訳, 1971, 『旧約聖書 ヨブ記』岩波書店.
- 田北耕也, 1957, 「楢山節考の宗教性を探る」『世紀カトリック総合文化誌』93 : 7-15, 51.
- 山本昌代, 1995, 『デンデラ野』新潮社.
- 柳田國男, [1945] 1970, 「親棄山（『村と学童』所収）」『柳田國男全集第十四巻』筑摩書房, 481-492.
- , [1910] 2016 『遠野物語』新潮社.
- 若林美どり, 1972, 「深沢七郎『楢山節考』について」『大妻国文』3 : 132-44.
- Weber, Max, 1920, *Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*. (= 1989, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店.)

※ 本稿は、鹿児島国際大学における2016年度前期学外研修（在宅研修）の成果の一部である。

## A Genealogy of Studies of *Kirō* (Ⅱ) : Literary Approach

Yoko SASAKI

This paper adopts a literary approach. Folklorists hold that the practice of *kirō* (the practice of casting the elderly off into the wilderness) never actually existed, but in literary imagination, it often appears as a way to explore old age and death. The paper focuses on three stories that can be seen as representative examples of post-war *kirō* literature: Shichirō Fukazawa's *Narayama Bushikō*, Kiyoko Murata's *Warabinokō*, and Yuya Sato's *Dendera*. By casting out elderly residents who are unable to work, impoverished villages are able to continue with their daily lives. The elderly women who are the main characters of these stories submit to this practice, accepting it as their fate. Though the details of the three stories vary, their characters share an attitude of understanding of their own abandonment, avoiding resentment of or resistance to their deaths and instead filling themselves with longing for the Pure Land. I compare the three stories in terms of their spatial construction of scenes, the characters' views on death, and their uses of *kirō* in their plots.

**Key Words:** *kirō* (the practice of casting the elderly off into the wilderness), literary imagination, old age and death, views of life and death